

～祝！朝鮮通信使のユネスコ記憶遺産登録～

下関市総合政策部国際課

(釜山広域市派遣職員)

阿部 さおり

アンニョンハセヨ！

10月24日からパリで開催された国連教育科学文化機関（ユネスコ）国際諮問委員会において、「朝鮮通信使に関する記録－17世紀～19世紀の日韓の平和構築と文化交流の歴史」が記憶遺産に登録されることが決定しました。

これは、平成28年3月30日に日本側はNPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会、釜山側は財団法人釜山文化財団の日韓2民間団体の共同で申請が行われていたものが記憶遺産へ登録決定されたものです。今回の申請件数は、日韓両国に所在する朝鮮通信使に関する外交、旅程及び文化交流の記録111件333点（内訳：日本側：48件209点、韓国側：63件124点）で、これらの記録のうち下関市に所在する資料は5件10点あり、うち4件9点が下関市立歴史博物館に、1件1点が赤間神宮に所蔵されています。

本市でも毎年馬関まつりの中で朝鮮通信使の再現行列が行われていますのでご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、今回は朝鮮通信使の歴史や下関との関わりについてご紹介したいと思います。

朝鮮通信使は朝鮮国王が日本に派遣した外交使節団で、室町時代に始まり江戸時代後期に終了するまでに計17回来日しています。来日の目的は、朝鮮国王が当時の日本の統治者と信義を通わす「通信」を行うことでした。そのため將軍の代替わりの祝賀や両国間の外交課題を解決するため、通信使は朝鮮国王から將軍宛ての国書を託されて来日しました。將軍はこれを受け取り、返書を通信使に託しました。特に江戸時代の朝鮮通信使は、両国間の平和的な関係の構築と発展に寄与し、両国間の人々の相互交流を深め、文化の発展を促したと言われています。

江戸時代の朝鮮通信使は、総勢400名～500名前後の大使節団で、ソウルから釜山までは陸路をたどり、釜山からは通信使船6隻に分乗して、まずは対馬を

目指しました。対馬に滞在した後、壱岐、福岡の相島を経て下関に寄港しました。下関からは瀬戸内海を航行し、大阪、京都伏見まで上がり、そこから陸路で彦根、名古屋とたどり、東海道を東上して目的地である東京に到着しました。往復約4,500km、1年近くに及ぶ道中だったと言われています。

朝鮮通信使が立ち寄った下関では、室町時代は阿弥陀寺（現在の赤間神宮）、江戸時代からは同寺と引接寺を客館にし、その応接は室町時代には大内氏、江戸時代からは幕命により長州本藩の萩藩が行いました。下関を領有していた長州支藩の長府藩も萩藩の命令で協力していますが、長州藩が下関で行った応接について、沿道の諸藩の中で最も優れていたとして高い評価を受けたという記録が残っています。

今回のユネスコ記憶遺産登録を記念した特別展「朝鮮通信使-日韓の平和構築と文化交流」が平成30年2月3日（土）から3月11日（日）まで下関市立歴史博物館で開催されます。実際にユネスコ記憶遺産に登録された資料を見る良い機会ですので、是非訪れてみてください。

（※）地名はすべて現在の名称で記載しています。



【下関馬関まつりの中で行われる朝鮮通信使行列再現行事】